

最前線

京滋ビジネス

木材の美しい姿を長期間保つことができないか。そんな思いで、水や菌、紫外線などから木を守る塗料の開発を続ける。伊藤博社長(72)が還暦を前に始めた研究は足掛け15年以上になる。塗料の施工実績も積み上げ、「シニアベンチャー」の挑戦はようやく花開きつつある。

きっかけは、和室に使う材木の先細りだった。菓子箱用の木を扱う「板商」が家業のルーツで、3代目の父が建築材に進出したが、失敗した。屋号の「丹宇」を引き継ぎ、材木販売業で再出発した。だが2000年代に入ると和室向け需要が顕著に低迷し、新規事業の創出に迫られた。行き着いたのは、宇治市の京都大生存圏研究所との研究だった。公開講座で感

丹宇 (京都市西京区)



銘を受けた故増田稔教授(生物材料設計学)の研究室に飛び込んだ。教授は針路に迷う伊藤さんを迎え入れ、「木をもっと知りなさい」と説いた。木材は日光や雨、微生物、ばい煙にさらされ、歳月とともに朽ちる。「劣化を止め、美観を維持できないか」。常識を破る塗料の開発をテーマに定め、京大の第一線の研究者や出入り業者らに教えを請った。

銘を受けた故増田稔教授(生物材料設計学)の研究室に飛び込んだ。教授は針路に迷う伊藤さんを迎え入れ、「木をもっと知りなさい」と説いた。木材は日光や雨、微生物、ばい煙にさらされ、歳月とともに朽ちる。「劣化を止め、美観を維持できないか」。常識を破る塗料の開発をテーマに定め、京大の第一線の研究者や出入り業者らに教えを請った。



「高卒で大学に行ったこともない。何も知らないからみんな丁寧に教えてくれた」。55歳で初めて味わう学問に魅了され、06年に合

木の美しさ、末永く



開発した合成樹脂塗料を施した木の板に水を垂らし、はっ水性を実証する伊藤社長(京都市西京区・京都大桂ベンチャープラザ)

はっ水力を持ち、水や菌によるダメージも防ぐ。これまで10回以上改良を重ね、東寺(南区)や高台寺の塔頭(東山区)といった寺社仏閣のほか、ユニバーサル・スタジオ・ジャパン(大阪市)のアトラクションにも施工した。難関だった紫外線耐性にもめどを付け、本社を置く京大桂ベンチャープラザ(西京区)で目下取り組むのは、品質を安定させて低コストで生産する手法の確立だ。伊藤社長は「大学の先生やお客さんに助けられ、量産まであと少しのところに来た。収益を安定させ、後世に事業を引き継ぎたい」と力を込める。

(柿木拓洋)

“老け顔”気になる男性に

気になる商品

株

決算や... は2万... 推移し... 前週は... 都圏で... 規感染... からず... る感染... 化が遅... 文が膨... に2万... 月6日... 値とな... 21年... 格化し、